

立教大学コミュニティ福祉研究所学術研究推進資金
大学院生研究 2010年度研究成果報告書

研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	コミュニティ福祉学・後期課程3年	任	賢 宰
指導教員	所属・職名	氏名	
	コミュニティ福祉学部・教授	森 本	佳 樹
研究課題	認知症高齢者を支えている家族への支援に関する研究—親密性の変容に焦点を当てて—	個人・共同の別	<input checked="" type="checkbox"/> 個人 ・ 共同 名

研究の概要 (200~300字で記入)

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入)

[認知症高齢者] [家族介護者] [支援]

日本と韓国の認知症高齢者と家族介護者の二者関係において病理(共依存、うつ、虐待、介護殺人、自殺など)へつながらない適切な介入方法及び介入時期を析出するため、現在日本と韓国で行われている認知症高齢者と家族介護者への支援について実態を明らかにすることを目的とする。そのために、日本と韓国の都市部において家族介護者と専門職双方から、支援に対する実態を明らかにするための調査を行う。当事者である家族介護者の主観的観点だけでは見出しにくい事項も想定されるため、専門職の客観的観点からも調査を行う。

研究成果の概要

日本と韓国の都市部(東京都・ソウル市)で、認知症高齢者の関連施設に勤めているケアマネジャー1名と社会福祉士3名の専門職と、家族介護者2名を対象にして、半構成的面接によるインタビューを行った。インタビュー項目については日本と韓国のサービスの差異や専門職と家族介護者の立場を考慮して構成し、専門職と介護を終えた家族ということから時期とサービスの利用に着目して、ナラティブ分析を行い、以下の結果を得た。認知症高齢者と家族介護者の二者関係において、病理へつながらない適切な介入時期及び介入方法を析出するためにそのアイデンティティ形成の過程を見てきたが、家族介護者は「イエ(血縁)」という意識から逃れることが出来ない。あらゆる大人や社会の都合によって来る現実から、当事者の適応・違和感のあり方が千差万別であり、10人十色である。認知症状の発症は、家族構成員、「イエ」の全員にとって大きな支障になる要素を潜んでいることを意味する。家族構成員の中で今まで維持してきた見えないバランスが崩れ、今までの問題解決方法では解決できないことで、ストレスが加わり、身体的・情緒的な負担によって危機感を抱くようになる。インタビュー調査から伺えたことは、認知症であることをわかり、症状を理解し、認知症高齢者に会うサービスを利用できるまで受動的な受け入れと能動的な受け入れを繰り返す過程を経て確立されていると言えるかもしれない。その反面、今までの認知症高齢者と家族介護者への支援は、「認知症の症状」という医療的状況にとらえて、生活全般に与える影響、特に家族という血縁にまつわる概念は見過ごしてきた感は否めない。認知症介護者と家族介護者の実態から現実と支援の格差があり、場合によっては支援そのものがマイナスに働く作用を持つともいえる。今後、認知症高齢者と家族介護者への支援に必要な方針として、認知症状にとられた「あるべき支援」の追求から、サービスという名のもとで認知症高齢者と家族介護者を引き離さず家族という輪の中での「多様な生き方の支援」への転換を視野に入れ、認知症高齢者と家族介護者一人ひとりのニーズにこたえることにつながるケアモデルが求められる。

※ この(様式)に記入の、経過・成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①~④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文(著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書(著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催(会名、開催日、開催場所)
- ④その他(学会発表、研究報告書の印刷等)